

「太地町捕鯨歴史文化財」

和歌山県太地町

太地町は捕鯨発祥の地として知られ、現在でも古式捕鯨の伝統を受け継ぎながら、IWC管轄外の近海での小型捕鯨が続けられている。

古来、熊野灘沿岸はクジラの回遊通路で、太地浦の豪族和田家一族の忠兵衛頼元が捕鯨事業の有望性に着目し、尾張師崎(知多半島の突端)の漁師・伝次と泉州堺の浪人・伊右衛門とともに捕鯨施術の研究をすすめ、慶長11年(1606)太地浦を基地として鯨方を組織し、大々的な突捕漁法による捕鯨をはじめた。これが日本における捕鯨事業の元祖である。



くじら供養碑

その後、延宝3年(1675)和田角右衛門頼治が突捕法に網を組み合わせた網捕法を考案し、太地捕鯨は飛躍的に発展した。天和3年(1683)頃には土佐室津(室戸市)に網捕法を伝授した。その功績によって領主から太地姓を授けられたという。そして、宗家和田、分家太地家を宰領として鯨網をつくり、村ぐるみで捕鯨を行った。

網捕法は大規模で、延宝3年の記録によれば、総舟数39隻、勢子舟25隻、網舟9隻、持左右(もっそう)舟2隻、山見納屋舟3隻、それに浜取舟となっている。また、陸上(おか)には向島に大納屋の他、鯨体処理場、鯨肉加工場、骨納屋等があった。大納屋には職場を総括する納屋旦那がいて、その下に各職場を支配する老翁(おやじ)がいた。

また、当時の捕鯨事業に関わる人数を推定すると、海上では多いときで約470人、少ないときで約270人である。この他、陸上で働く山見、大納屋、鯨体処理関係等で少なくとも100人前後の陸(おか)人がいたと思われ、捕鯨事業がいかに大規模なものであったかがわかる。

表 陸上での各職場

名称	役割
大工方	舟及び櫓その他諸道具類の新造、修理、舟の色彩を施す
鍛冶方	鉚、解剖包丁類、造舟用の釘や金具等の新造、修理、保管その他金物細工
桶屋方	網浮けに用いる樽、鯨肉の塩蔵に使う樽等の新造、修理、保管
道具方	各種の道具の仕入、修理、保管、出納
網納屋	網の新調、修理、保管等

表 網捕法の従事者数

種別	乗組員数/隻	最小		最大	
		舟数	人数	舟数	人数
勢子舟	15人	14隻	210人	25隻	375人
網舟	12~13人	2隻	26人	3隻	39人
持左右舟	10人	2隻	20人	4隻	40人
樽舟	8人	1隻	8人	1隻	8人
道具舟	10人	1隻	10人	1隻	10人
合計		20隻	274人	34隻	472人

資料-太地町史より作製

しかし、和田氏が創業し200年以上続いた突捕法・網捕法による捕鯨事業も、我国沿岸における欧米の捕鯨活動により、幕末になるとクジラの回遊も減少し次第に衰退しはじめた。そして、明治11年(1878)12月24日、子持ちの大きなセミクジラを追って100名以上が遭難した大惨事をきっかけとして、ついに太地浦の古式捕鯨は終止符をうった。